

# アメリカの学校のみかた

## - 普遍性と多様性に関する一試論 -

楠 山 研\*

### A Tentative Study on the Generality and Diversity among Schools in America

Ken KUSUYAMA

#### 1. はじめに

改めて言うまでもないことだが、アメリカの教育は多様であり、州ごと、地域ごと、学校ごと、教員ごとに異なった様子を見ることが出来る。これまでアメリカの教育に関わってきた先人たちは、そのまとめがたい多様性をそれぞれの視点から切り取り、まとめようと努力してきた。こうした取組によって、日本の教育を受けただけの私たちは、アメリカの教育が多様であることを知り、また簡単には理解できない部分があることを知ることができる。アメリカの教育は、と一口に語ることはできないと知ることが、アメリカの教育を知るための第一歩ということができる。

そうした段階を経て、アメリカの学校を訪問する機会に恵まれた時、私たちは立ち止まってしまう。目の前にある学校は確かにアメリカの学校であるが、多様性のあるアメリカの中で、この学校の事例をどのように受けとめたらよいのか。それだけを見てアメリカの学校を語るわけにはいかないが、しかし広大で多様なアメリカのどことどの、どれだけの学校を見たら、それは解決されるのだろうか。北部を見れば南部を見る必要性を感じ、西海岸を見れば東海岸を見る必要性を感じ、当然中部を見る必要性を感じるであろう。同じ地域の中でも白人ばかりの学校を見れば、そうでない学校を見る必要があるし、アジア系の多い学校を見れば、ヒスパニック系の多い学校を見る必要がある。アジア系が多い学校だからといって、どこも同じ教育をしているというわけでもない。そうこうしているうちにも、それぞれの教育は少しずつその姿を変えていく。私たちはいったいいつ、アメリカの教育について語る事ができるのだろうか。

本稿は、すでに述べたような、アメリカ研究において避けて通ることのできない大きな壁をふまえつつ、私たちが現地を訪れることによって目の前に現れた「アメリカの学校」（アメリカの教育のごく一部の姿）について、どのように扱っていけば良いのかを考えるための試みである。先行研究では、まとめがたいものをまとめたために見えにくくなっている部分がある。これについて、ある地域のある学校の事例をもとに、実際の学校の場面を描写しながら明らかにしていく。そこで使用される事例は、広くて多様なアメリカの中のごく限定された一部の地域の学校のものであり、これがアメリカの全てを表すわけではもちろんない。しかしそこには随所に、私たちがイメージする「アメリカの学校」の姿が

\* 教育学部人間発達講座

見られ、またそうではない部分も見られる。そうした事例を示しながら、私たちのもつ「アメリカの学校」のイメージを少し厚くしていくことが本稿の目的である。

本稿で主に言及する事例は、アメリカ西海岸カリフォルニア州ロサンゼルス郡内のA学区とそこにある学校である。ロサンゼルス中心部に近接し、アジア系やヒスパニック系が多く居住し、治安は比較的安定している地域である<sup>1</sup>。

## 2. 行政区画とは一致しない学区

アメリカには学区 (School District) があり、そこがその地域の教育に最も大きな影響力をもっている、というのが一般的な理解であろう。「連邦政府には教育の内容や制度を統制する権限は与えられていない。教育の目的、内容、方法、制度などはすべて各州政府の機能であり、加えて多くの州の権限が地方の教育行政の単位である学区に委譲されている。(中略) 学区は特別地方公共団体であり、市町村の一般行政から独立しているのも、独自の課税権 (固定資産税を基本とする教育税徴収) や起債権を有している」(佐藤・二宮, 2014年, p.136)。もともと国ができる前に地域があり、学校があったという事情から、徹底した地方分権主義に基づき、各地で多様な教育が行われる可能性を生み出し、同時に激しい地域間格差を生む要因となってきた。

学区は日本でもなじみのある言葉ではあるが、多くの先行研究でも相当の字数を割いて説明されているように、実際の姿は大きく異なっている。例えば、この学区は、一般行政区画と一致していない場合がある。A学区は、同名のA市 (City) の全域をカバーしているが、それ以外の近隣地区の一部も含んでいる。A学区には、K-8 (幼稚園年長に相当するキンダーから8年生まで) の学校が13校あるが、このうちA市内にあるのは9校で、残る4校は南側に隣接するB市内にある。それぞれの学校の通学可能地域も行政区画とは一致しておらず、A学区は、A市の全て、B市のほぼ全域、東にあるC市の一部、D市の一部から成り立っている。

A学区の正式名称は、A Unified School District であり、この Unified (統一) は、キンダーからハイスクールまでを含んでいることを意味している。A学区には5つのハイスクールがあり、4校はA市、1校はC市にある。K-8の学区がカバーする範囲とハイスクールがカバーする範囲も若干異なっている。

参考までに、A学区の中心であるA市の人口は2010年時点で約8万3,100人である。その構成はアジア系が4万4,000人で半数以上 (全人口の52.9%) を占め、中国系が最多の3万1,000人 (同37.3%)、ベトナム系が4,200人 (同5.1%) となっている。その他、ヒスパニック系が2万8,600人 (同34.4%)、白人が2万3,500人 (同28.3%)、黒人あるいはアフリカ系が1,300人 (同1.5%) である。

アメリカの学校運営に関しては、連邦政府の補助金が5~6%、州政府からの補助金が50%程度であるため、学区の税収入の多少が、その学区の教育を大きく左右することになる。つまり、「資産価値の高い地域の学区は多くの税を課税できるが、貧困地域の学区の税収入は少なくなる」(佐藤・二宮, 2014年, p.136)。この税収入の差により、児童生徒1人あたりにかける費用の格差は数倍にもものぼる場合がある (フォンス・太田, 1995年,

<sup>1</sup> 本稿におけるA市、A学区およびX学校に関する情報は、それぞれのウェブサイトや配付資料、筆者の調査による。

p.148)。その差がそのまま、学校施設や設備、教員、教具等の差として表れるのである。

ここに加えて、寄付という要素も見すごすことはできない。各学区や各学校は保護者や地域住民から様々な方法で常に寄付を募っている。この辺りの学校の入口付近には大きな背の高い書き換え可能な掲示板が立てられており、通常はそこに月の行事予定等が表示されているが、ある小学校では一年中、小学校低学年に音楽教育を実施するための寄付を募る内容が掲示されている。大通りには学区の年度寄付目標額（30万ドル）と達成度がグラフで示された看板があちらこちらに立てられており、寄付によってK-3学年の音楽教育、4-8学年の音楽のサポート、ハイスクールの進学就職のカウンセリングなどができるようになり、全ての児童生徒のためになるという文章が添えられている。なお、隣接する、より豊かとされる学区が提示している目標額は60万ドル以上であり、同時点ですでに実績額が55万ドルを超えていた。この寄付も、その地域の資産価値や住民の状況に大きく左右されるものであることはいうまでもない。

### 3. 学区の一年

アメリカの学校の年度が9月から始まるということは日本でもよく知られている。「アメリカの学校は秋から始まる。ある小学校では9月7日が始業式である」(佐藤・二宮, 2014年, p.129)。「新学期開始時期はたいてい九月初めであるが...」(フォンス・太田, 1995年, p.138)。しかし、現在、少なくともカリフォルニア州では多くの学校が8月中に始業している。

A学区は始業から終業までおよび休日を学区で定めており、学区内で同一の日程が組まれている。これをもとに、一年の動きを確認しておこう。

2015-2016年度は8月14日に始まる。前年度は5月29日で終業していたため、76日間の長い夏休みが終わって、子どもたちは登校してくる。年度初めからの入学の手続きは、6月頃おこなわれる。日本の学校の場合、まずは市役所等に行き、必要な説明を受け、手続きを進めることになるが、アメリカの場合、新年度からの入学であっても、途中転入であっても、学区の事務所に行く必要はなく、直接学校に行くことになる。転入学の際に必要な書類は主に、在住証明、生年月日の証明、保護者のID等である。在住証明は「ガス、電気、水道、電話等の請求書」、「運転免許証」、「銀行口座証明」、「住居の賃貸契約書」などのうち3つがあればよいことになっている。また、日本からアメリカへの転校の際、主に問題となるのは予防接種である。一般にアメリカの子どもに求められる予防接種は日本より多く、また種類が異なることもある。よって学校医や病院において母子手帳等でそれまで接種されたものを確認し、その年齢で足りない予防接種を全て打った段階で入学許可が下りることになる。

A学区のK-8は3学期制(Trimester System)をとっているが、その区切りは長期休暇とは必ずしも一致しない。1学期は8月14日から11月5日までで、その間に長期休暇はない。一方、2学期は11月9日から2月26日までであり、その間に感謝祭の休日(11月末の一週間で、前後の土日を含めて9日間)と、冬休み(12月21日から1月2日までで、前後の土日を含めて16日間)がある。3学期は3月1日から5月27日までであり、3月28日から4月1日までが春休みで、前後の土日を含めて9日間休む。なおA学区のハイスクールは2学期制(Semester System)をとっており、前期が8月14日から12月18日まで、後

期が1月4日から5月27日までである。

長期休暇の他, Labor day (9月7日), Pupil Free Day (11月6日), Veteran's Day (11月11日), Martin Luther King, Jr. Day (1月18日), Lincoln's Birthday (2月8日), President's Birthday (2月15日) という6つの休日がある。5月27日が最終日で夏休みに入るため, 年によって日付が変わる Memorial Day (5月30日) はこの年度は夏休み中に迎えることになる。

学区の規定に式典のことは記載されていないが, 例えば後述のX学校では入学式はおこなわれず, 始業前日の8月13日に新入生のためのオリエンテーションがおこなわれる。各学期の始業式, 終業式といったものはない。ただし, 8年生の卒業にあたっては, 5月26日に親も参加する Promotion & Party が実施され, 子どもたちはガウンや帽子をかぶって登校し, 卒業を祝う風船やぬいぐるみ, 花がプレゼントされる。

#### 4. 学校(K-8)の一日

アメリカの学校の全体像を描こうとすると, どうしても抜け落ちてしまうのが, 子どもたちの1日の様子である。これを補うため, 多くの先人たちも使ってきた方法である, ある学校の一日として記述してみることにする。

X学校はA学区内のA市にあるK-8の学校である。A市の人種構成などを反映して, 多様な背景の子どもたちが通う学校である。全校生徒の約半数がヒスパニック系, もう半分がアジア系で, その2つで9割を超える規模を有している。学校入り口に掲げられている横断幕には, 「Welcome」の他, 「Bienvenidos」(スペイン語), 「歓迎」(中国語), 「Chao mu'ng」(ベトナム語) が記載されている。2014-2015年度のデータによると, 全校児童生徒数約600人のうち, 約200名が英語指導を必要とする子ども(English Learner Students)と判定されており, その母語は広東語が65名, スペイン語が64名で, 中国標準語が32名, ベトナム語が13名と続き, 日本語は2名であった。

月曜日から金曜日まで, 朝は8時10分までに登校する。登校の方法は, おなじみの黄色いスクールバスに乗って来る子どももいるが, 近隣に住む子どもは親や祖父母と徒歩で来る他, ほとんどは親らが運転する自家用車でやってくる。そのため, 朝8時頃の学校は路肩に止められた車で囲まれ, さらに隙間が空くの待つ車が列をなす。子どもたちはすぐに教室には入らず, 中庭にクラスごとに並んで, 時間が来たら担任とともに教室に入っていく。朝は始業前に, 点呼, 忠誠の誓い, 本の読み聞かせ, 担任の話などが行われる。時間割は毎日同じ, ということが多い。

休憩時間(Recess)は, 4・5年生が9:45から10:05まで, 1~3年生が10:05から10:25まで, 6~8年生が10:35から10:55までとずらして設定されている。子どもたちは校庭の遊具を使ったり, ボールを使って野球をしたりと, 終わりのベルが鳴るまで走り回り続ける。その間, 校庭の安全を見るのは保護者ボランティアである。

昼食は, ダイニングルームの都合により, これも学年ごとに時間が設定されていて, 4・5年生は11:15から12:00まで, 1~3年生は12:05から12:50まで, 6~8年生は1:00から1:45までである。自宅からお弁当を持ってくることもできるが, 多くは学校が提供するランチを食べている。このメニューは学区で統一されており, ハンバーガー, ピザ, サンドイッチ, コーンドッグ(アメリカンドッグ)といった子どもが好きな主食に, コーンやブ

ロッコリー、にんじん、豆といった野菜1、2品とオレンジジュースやミルクがつくといったもので、1食3ドルである。金額は事前にインターネット上で払い込んでおく。家庭の収入により減免処置がある。また朝食も1食1.5ドルで提供されており、シリアルやサンドイッチに果物、飲み物がついている。

学校が提供するランチを食べる際には、子どもたちがカウンターに列をつくる。そこで担当の職員にモニターに映し出されている支払い済みの名前を確認してもらってから、食事をセルフサービスで受け取る。年度の初めにはそれぞれの子供がミールカードを持っており、そのバーコード等で名前を確認するが、しばらくすると職員は子どもの顔と名前を覚えるため、カードがなくても手続きがスムーズに進められるようになる。

1年生から8年生まで、下校の時間は2:29であり、終業のベルと同時に子どもたちが親や祖父母が待つ場所に駆けだしてくる。その時間も周辺は自家用車で渋滞が起きている。担任が外まで出てくることはほとんどなく、1人1人迎えを確認するということはない。まだ迎えが来ていない子どもは、友達と遊んだり、日陰に座ったりしながら待つ。まれに、警察車両が待機している場合もある。

なお毎週木曜日は「Short Thursday」として、終業時間が1:00になっている。その場合、昼食の時間は30分間に短縮される。これに合わせているのかどうか定かではないが、近隣の美術館や博物館が定期的実施する無料入場の日は木曜日夕方に設定されるケースが多い。プロ野球のロサンゼルス・ドジャースも平日は通常夜7時試合開始であるが、まれに木曜日の午後4時半試合開始ということがある。

また、始業の日、終業の日、保護者関連のイベントが行われる日などは、「Minimum Day」として、昼食なしで12:00に終了する。

## 5. アメリカ社会を反映した教室

さらに教室の中の様子となると、これは同じ学校の中であっても教師の考え方などに左右されて、普遍的なものを描き出すことはとても難しい。よって、以下のような表現が最もわかりやすく、適切なものといえよう。

「アメリカの教室を見て感じることは、カラフルであること。座席配置が自由であること。ゆったりとしていること。明るいこと。多様な児童がいること。服装が自由であること。あまりノートをとりそうにないこと。発言が多いこと。OHPやTV、あるいはパワーポイントやインターネットがよく使用されること。教室には親などがテストの採点、勉強が遅れやすい子どもなどの支援をするために、ボランティアとして働いている姿や教育実習生の姿もよく見受ける」(佐藤・二宮, 2014年, p.129)。

教室の装飾は担任の考え方によって雰囲気が大きく異なるが、全ての壁を使用して掲示物や子どもの作品を飾っており、ほとんど隙間はない。ボランティアの保護者にも手伝ってもらって、天井まで飾り付けている教室もある。教室は長方形であり、長い辺が廊下と中庭に面し、中庭側の大きな窓からは明るい光が入ってくる。廊下に面した側の壁に大きなホワイトボードがあり、基本的にはここを中心に授業は進んでいく。ただし子どもたちの机の全てがホワイトボードに向いているわけではなく、グループごとにまとめてあったり、コの字型を組み合わせたような複雑な形になっているため、ホワイトボードに対して横を向いたり、後ろを向いたりしている子どももいる。

低学年の教室の場合、ホワイトボードの前に、大きなマス目の書かれたマットが置いてあることが多い。これは、朝の点呼や担任の話の際、子どもたち1人1人をそのマス目に座らせて、集中させるために用いる。子どもたちの座り方は体育座りのようであったり、あぐら座りのようであったりさまざまである。どのマス目に座るかは基本的に決まっている。また通常の授業中でも、集中できない子どもだけをマットのマス目に座らせて作業をさせるといった使い方もある。

クラスは原則として学年ごとに組まれるが、日本で言う複式学級もしばしば見られる。例えば、クラスの3分の2が3年生、3分の1が2年生というような構成であり、コンボクラスと呼ばれる。この構成について学校から公式のコメントがあるわけではなく、人数がアンバランスになったためということになっている。ただし、上級学年のうち学力や言語力に課題を抱える子どもを下級学年と一緒に教えるという意図もあると考えている保護者もいた。

また移民してきたばかりなど、英語力の指導が必要な子どもたちには、集中的な取り組みが行われる。課内課外の時間にそうしたテストが実施され、必要と判断された子どもたちについては、別のクラスに集めて特別な指導を行うことがあり、同じクラスの中でグループとして集めて指導をする場合もある。

新年度の最初には、クラスの担任教員と子ども、そして保護者との間で契約が結ばれる。例えばクラスのルール、図書利用のルール、宿題のルールなどであり、手紙を通じてサインをするものもあれば、教室に子どもたち全員のサインをつけて掲示するものもある。こうして子どもたちはアメリカ社会のルールと作法を学んでいくのである。

新年度には必要な文具のリストが学年ごとに提示され、保護者は近隣の文具店等で購入することになる。ただし、全員が全てを用意することは求められておらず、経済的に難しい場合には、クラスの備品が貸し出される。また同時に、コピー用紙などの寄付も求められており、文具店のプリペイドカードといったものも歓迎される。普段は、日本の筆箱のようなものを必ずしも持って行く必要はなく、クラスにある鉛筆や消しゴムでよければ、それを使うことができる。特に気に入っているペンなどがある子どもは、それを家から持って行って使う、といった感じである。

A学区では子どもたちに制服が決められている。といっても、細かい規定があるわけではない。例えばシャツはポロタイプかタートルネックで、色はネイビーブルーか白かスクールカラー(X学校の場合は濃いレッド)、パンツとスカートはネイビーブルーかカーキで、ひざがかくれる程度の長さといった具合であり、メーカー等が決まっているわけではない。各学校はエンブレムやマークを持っており、それを胸に刺繍してくれる業者がある。またしばしばスポーツユニフォームの日があったり、ハワイアンの日があったりして、その日は制服のルールにとらわれず、自由な服装で登校ができる。

教科書は無償貸与で、図鑑のような頑丈で重いつくりのものが多いため、家に持ち帰ることはほとんどなく、机の中に置きっ放しになっている。日本の授業を見慣れていれば、子どもがノートに何かを書くという場面はとてもなく感じるであろう。しかし、この教室で行われる授業は、近年大きく変わりつつある。カリフォルニア州では2014年度からモン・コアという考え方が導入されている。これについては後述する。

「アメリカでは、あくまで行動の単位は個人である。学級の係活動なども、班ではなく

個人に割り当てられ、個人が責任をもってそれを行うことだけが期待される」(川口, 1998年, p.69)とあるように、クラスの係が決められ、それが時々変わることは日本と同様であるが、班ではなく個人が係として任命される場所は異なっている。教室は安全のため内側から施錠される仕組みであり、誰かが来たときにその鍵を開ける係、というのがある。いわゆる「頑張り表」も班ごとではなく、個人戦である。

教室をでて、校外で学習する場合には、事前に保護者に文書が配布され、承認の署名が求められる。例えば、隣接するハイスクールの生徒に読み聞かせをしてもらう活動を10年以上続けている教員がおり、そのクラスの子どもたちは毎年5月にその活動を実施している。こうした活動が学年全体として行われることは少なく、各クラス、各教員が個別に実施する場合が多い。

成績表は学期ごとに封筒に入れて配布される。各教科について4～5段階で示されており、担任のコメントがつく。また、原則として毎週金曜日には、その週の振る舞いが評価されたものを持ち帰らせる。内容は教員によって異なるが、宿題を完成させて持ってくる、リーディングの課題をこなしている、クラスでの作業を時間内に完成させる、自分でする(Works Independently)、注意深く聞き、おしゃべりを自制する、しっかり、丁寧に仕事をする、全体的な振る舞いなどについて、各項目が4段階で評価されており、確認した保護者が署名して月曜日に返却する。これがアメリカの学校が子どもに求める振る舞いということになるであろう。

## 6. 小学校教員

教員の採用や役割も、日本とは異なる部分が大きく、またアメリカでも州や学区によって様々であるため、記述の難しい部分といえよう。

「アメリカの学校教師には、一定の自由がある。教育課程が綿密に定められていないので、自らの教育理念を基に、自分で内容を含めた授業計画を立て、実践する」(佐藤・二宮, 2014年, p.134)。アメリカの小学校も日本と同様、学級担任がほぼ全ての教科を担当するシステムであるが、同じ学年を継続して担当するケースも多く、30年間同じ教室で3年生だけを教えている先生がいたりする。

「公立学校の教師は学区ごとに採用され、基本的に異動はない。採用後に終身雇用権(tenure)を得ると、正当な理由がない限り解雇されない。ある程度の安定が保証される。アメリカの教師の多くは週40時間以上働いているが、夏休みは働かない。年間10か月契約を基礎としているからであり、給与も10か月分が支給される。公立学校教師の平均給与は、約56,000ドルである」(佐藤・二宮, 2014年, p.134)。

実際には教員の契約形態により異なり、夏休みの間も月割りされた給与が支払われている場合がある。ただし、基本的に夏休みに仕事がないことは同じであり、学校に来ることは求められない。通常の日も、授業が終われば仕事は終わりであり、学校に残っている必要はない。例外的に保護者との面談がある時期などは授業後も残っていることが求められるが、それは契約の際に事項として記載されているようである。なお財政の厳しい学区では、財政難を理由に解雇されるケースもあり、身分の保証については少し状況が変わってきている雰囲気がある。

「教師をめぐる問題の一つとしては、離職の問題がある。毎年約8%の教師が職を離れ

る」(佐藤・二宮, 2014年, p.134)。その理由は、教職自体をやめる場合もあれば、他の学校へ移る場合もある。どの各学区にとっても、教師の確保は重要な仕事である。

教員養成コースのある大学ではしばしば教員採用に関するフェアが開かれている。大学のロビーやエントランスに各学区や私立学校のブースが設けられ、かわいらしい文房具のプレゼントなどをしながら、各学区の特徴や教師として働くことの魅力などをアピールしている。そこには当然給与の話も登場する。A学区が示した資料には、その時点で募集していた高校教員や小学校特別支援教員などの給与として4万7,000～6万7,000ドルが示されていた。現在の日本円に換算すると570万～810万円程度になる。小学校と高校、特別支援教育による給与の差はその資料からは判断できないが、フルタイムで働く場合の基本となる金額がこれということのようであり、臨時教員でもフルタイムの場合は同額が示されていた。学校心理士といった専門的な職には、6万1,000～8万3,000ドルという金額が示されている。なお、応募に必要な書類として、大学の成績証明書の写し、資格証明書の写し、英語学習者への教育状況、自己紹介、推薦状(2年以内のもの3通)、NCLBコンプライアンス、履歴書、教員の教科知識やスキル等を測るBESTとCSETの結果の写しなどが記されている。

地域のための学校という位置づけから、保護者が学校運営に果たす役割はさまざまな面で期待が大きい。PTAへの加盟、月1回の保護者ミーティングへの参加の他、イベントがある度にそのボランティアとしての参加が求められる。また各クラスには保護者ボランティアが入っており、宿題の採点や教室の飾り付けといった教員の補助をこなしている。

なおA学区では、このボランティアになるために、肺のX線検査、指紋登録と背景チェックが必須条件となっている。それは1999年のコロラド州コロンバイン高校銃乱射事件以降、全国的に学校の安全管理について検討が続いていることと関係がある。「アメリカの学校は、いかに安全な学習環境を保持するかに力を入れている。外部からの侵入者を防ぐために学校を施錠したり、監視カメラを設置したりしている」(佐藤・二宮, 2014年, p.133)。こうした状況において、A学区では周辺学区よりもかなり厳しい規定を採用しており、例えば校外学習の引率手伝いの際にも、この3つの条件をクリアした保護者でないとボランティアとしての参加はできない。かつては出入りが自由であったX学校の入口も、現在は常に施錠されている。

## 7. 地方分権主義の現在

こうした多様性をもつのがアメリカの教育であり、その大原則である地方分権主義にも変更はないものの、事実上その姿が次第に変わりつつあるというのは、全米を通した傾向といえそうである。

「連邦政府には教育の内容や制度を統制する権限は与えられていない」(佐藤・二宮, 2014年, p.136)とされてきたアメリカであるが、近年連邦政府が教育に影響を及ぼす場面が少なくない。「近年、アメリカでも連邦政府が教育に関与する割合が増してきたことは看過できない。州によって財政能力に格差があり、また今日では州の力量では解決困難な課題が発生する時代になってきたために、連邦として対処しなければならない状況が多く生じてきた。その結果、教育に関する多くの連邦法が制定され、連邦が主催する多くの教育プログラムが実施され、多額の連邦の補助金が投入されるようになってきているので

ある」(川口, 1998年, p.67)。

2002年、ブッシュ政権のもとで生まれた NCLB 法(どの子ども置き去りにしない法)により、学習成果をあげない学校への制裁という形で学校のアカウントビリティを追求する方向性は、オバマ政権になっても基本的に維持されている。教育スタンダードや学力テストの合格点を各州が定めることにより、全米でその水準にばらつきがあったことを改善するため、全米共通のスタンダード(コモン・コア・スタンダード)の策定が進められた(二宮, 2006年, p.123; 佐藤・二宮, 2014年, pp.139-140)。「これらの方策を州の政策として導入するかは、州の自由である。しかし、ここで利用されたのが、教育改革を進める州に対する競争的資金の配分政策である。『頂点への競争(Race to the Top)』と呼ばれるプログラムを通じて、NCLB 法の枠組みを強化(コモン・コア・スタンダードの導入や制裁措置の強化)する州に、莫大な競争的補助金を提供する。多くの州はこのプログラムへの参加を通して、結果的に学力テストに基づくアカウントビリティ政策を強化しているのが現状である」(佐藤・二宮, 2014年, p.140)。

カリフォルニア州では、もともとスタープログラムと呼ばれる州独自の学力スタンダードがあったが、2014年からコモン・コア・スタンダードを導入した。大学の教員養成課程の授業でも、学校の保護者会でも、コモン・コアは常に話題の中心であり、課題となっている。もともと、学力テストの結果が公表される形ができあがっていたが、2015年からはコモン・コア・スタンダードの考え方に応じた形で、学校全体の状況が公表され、また子どもそれぞれの状況が家庭に報告されるようになっている。

では、このコモン・コアとはいったい何なのか、ということになると、それは誰からも明確な答えは返ってこない。しかし、それは日常の授業においても、子どもが持ち帰ってくるテストや宿題にも、大学の教員養成課程の授業にも大きく影響を与えている。例えば、小学校の段階では、批判的思考などを含みつつ、分析し、話し合い、証明するといった活動を通じて思考を深めること、現実社会で起こりうる課題に取り組むこと、子どもたちが学んだことが論理的に証拠をつけて説明できることなどが強調されている。

学校の授業では、例えば算数の計算であれば、これまでは式が示されてそれに正解できればよかったが、コモン・コアでは、なぜそうなるのかという過程を詳しく説明しなければならなくなった。これは、平日に毎日出される宿題にも反映されている。宿題の内容は主に英語と算数であり、その内容にはコモン・コアとの関連をみることができる。計算問題であったら、答えだけでなく、なぜその答えに至ったのかを文章で示すことが求められる。計算式だけ書くなら1行しか必要としないような問題であっても、解答欄は非常に大きく、問題によっては1ページ分とってあることもある。また読書が重視されていることもコモン・コアの影響と考えられ、学校が指定した本や自分が選んだ本について読み、感想を書いたり、その内容や感想を絵で表現したりすることなどが求められる。こうした授業や宿題の援助をしてくれる、電話のホットラインサービスも新たに実施されるようになっている。

なお、金曜日には宿題が出ず、週末にはリーディングのみをすることになっている。小学校低学年でもかなりの時間を要する宿題が出されるため、これがない金曜日と週末は子どもたちも親も解放された気分になる。しかし、例えば土曜日に日本語で授業を受ける補習授業校に通っている子どもは、現地校の宿題に加えて、補習授業校の宿題もこなす必要

がある。補習授業校は、日本の学校や全日制の日本人学校が1週間かけて教えている内容を1日で教える必要があるため、進度も速く、宿題も多い。他の子どもが金曜の放課後から遊び三昧の生活を送るのを知りながら、自分だけさらに休日1日の学校とかなりの時間を要する宿題をこなすことは、簡単ではない。

#### 8. アメリカの学校のみかた

アメリカの教育の全体像を描き出そうとすることはそもそも無理な話であるが、それでもできるだけ日本の読者にイメージが伝わるような工夫が、これまでの先行研究でもなされてきていた。しかし、他の国ではもう少し踏み込めるような部分に踏み込んで書いてしまうと、アメリカの教育の普遍的な部分が失われてしまうという難しさがある。本稿では、そうした部分を乗り越える1つの方策として、ある地域のある学校について、具体的に記述し、これまでより少し厚みのあるアメリカの学校像を描き出そうとし、それは一定の成果が得られたと考えている。

しかし、やはりこうした一事例をそのままアメリカの学校として提示するのは無理がある。ある学校では、学校の中で別の学校を運営していた。もともとの学校では、ここに記述したようなカフェテリア方式のランチとしてハンバーガーなどが準備されていたが、同じ校舎の別の場所では、人間に必要な栄養要素を子どもたちにもわかるように図示した上で、野菜の多い、バランスを考えた食事が提供されていた。チャータースクールの一形態とみられるが、こうした光景もアメリカの学校であり、しかしそうではない形のアメリカの学校が多数あることもまた事実である。

先行研究のおかげで、私たちは事前に一定の知識をもった上でアメリカの学校に入ることができる。それが故に、その地域独自の部分や時代の進展による変化に気付くこともできる。これからアメリカの学校に入っていこうとする方にとって、本稿の事例が少しでもその役に立てば幸いであるし、また筆者自身もアメリカの学校に対して厚みを増していけるよう努力していきたい。

#### 【参考引用文献】

- ・川口仁志「アメリカ - 教育文化の比較 - 」石附実『比較・国際教育学(補正版)』東信堂, 1998年, pp.62-82。
- ・現代アメリカ教育学会編『現代アメリカ教育ハンドブック』東信堂, 2010年。
- ・佐藤仁・二宮皓「忠誠宣言とスクールバスがある学校 アメリカ」二宮皓編『新版 世界の学校 教育制度から日常の学校風景まで』学事出版, 2014年, pp.128-140。
- ・二宮皓「忠誠宣言のある学校 アメリカ」二宮皓編『世界の学校 教育制度から日常の学校風景まで』学事出版, 2006年, pp.114-125。
- ・フォンス智江子・太田晴雄「多様ななかの平等を模索する学校 - アメリカ」二宮皓編『世界の学校 比較教育文化論の視点にたつて』福村出版, 1995年, pp.136-149。
- ・深堀聰子「アメリカの教育」田中圭治郎編『比較教育学の基礎』佛教大学通信教育部, 2004年, pp.81-102。